

9月全学連大会へ!

全学連(斎藤郁真委員長) 書記局通信

2018年8月25日
No.521

Tel 03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
http://www.zengakuren.jp/

全学連大会アピール②

◆京都大学・A

「自由の学風」を謳う京都大学では、今まさに学生が守り続けてきた自由が踏みにじられようとしています。立て看板規制に学生寮潰し、カリキュラムの強化、印刷サービス有料化、ビラ撒き規制…。これら全て当事者である学生に何の相談もなく、一方的に大学が決めたことです。そして一方的な決定に対して「おかしい」と声を上げる学生は、「大学の命令に従わない者」として懲戒処分を受けたり、大学を出禁になったりします。何が正しくて何がおかしいのか、自分で考えて主張することも許されず、一つの価値観を押し付けられる。これほど不条理で非人間的なことはありません。

また、支配が強化されているのは学生だけでなく、教員も同じです。教授会の権限はどんどん失われ、競争原理の導入は、金になる研究や国や企業の望む研究への偏向を招き、学問の自由・豊かさが危機に瀕しています。

そして、このような大学による支配強化の先に、どんな社会が待っているか想像してみてください。大学の自由と豊かさが失われれば、それは間違いなく社会に波及します。思い返してみれば、戦前の日本の思想統制は、京都大学で起こった京都学連事件、そして滝川事件に始まりました。京大の問題は決して京大だけの問題ではありません。全国大学と共通した問題であり、社会と直結した問題です。

私は単に京大の自由を守りたいためではなく、どんどん息苦しくなっていく現代社会に風穴を通し、人間が人間らしく生きられる社会を取り戻すために、京大で運動を続けています。しかし、京大で運動を展開し、情勢を変革していくためには、京大生の力だけでは足りません。市民や他

大学の学生との連帯は不可欠です。私は、他大学での実践についての話を聞いたり、協力関係を築いたりするために、全学連大会に参加しようと思います。より広範な協力関係を築くために、より多くの、多彩な人が集まって話をしてくれることに期待しています。この文章を読んでいる貴方もぜひ全学連大会に参加して、貴方の学校でのお話を聞かせてください。

◆京都大学・B

自分は、京大タテカン攻防に関わる学生である。もとより私は、学生の自治などに興味のない人間だったが、景観条例と言いながら構内のタテカンも撤去する、そういった



全学連第79回定期全国大会

改憲・戦争をとめる大学ストライキをやろう!

9月1日(土)~2日(日)

(1日) 月島区民館 (2日) 笹塚区民会館

※1日は午前10時開始 参加費用=1000円(会場代、資料代)



目の前の理不尽がどうしても許せず、タテカン攻防に関わり始めた。最初は目の前の課題しか見えておらず、ただタテカン規制に反対するのがせいぜいだったが、タテカン闘争の意義は本質的にはキャンパスの管理権、決定権をめぐる闘いであり、大学がブルジョワ政権の私物か、人民に知識を発信する為の人民の大学であるのかを問うものであると気づき、学生自治の復権を目指すようになった。そもそも、全世界の共有財産たる土地をまるで自分のものであるかのように振る舞う新自由主義大学当局は、アメリカ大陸開拓の際の植民者のように、土地の所有権を一方向的に主張し、この世に存在するあらゆる私的所有から解放された事物を私有財産制に組み込もうとする機関に他ならない。今、全国、全世界のあらゆる大学において闘われている大学内の決定権をめぐる闘いは、紛れもなくブルジョワジーによる大学私物化との闘いであり、一体の者であることを確信し、全学連大会に結集する。

◆京都大学・C

「え？いつそんなルール決まったの？」

大学に通っていて、こんな風を感じた経験、みなさんにはありませんか？

学生たちが真理を探究し、社会について考え論じあい、活発に行動する場所だった大学は、私たち若い世代が入学した時には既に「いかに条件の良い企業に就職するかを目指した就職予備校」でした。そこでは私たちは大学が用意したサービスを受ける人間でしかなく、違和感を感じても「なら大学を辞めればいい」「入学してきたのは君だ」と言われるだけの存在にされています。

一人で大学に文句を言おうものなら、どうなるか分かりません。個人対大学組織。力の差は歴然です。悪くすれば処分されてしまうかもしれません。そういう力関係を何となくわかっているから、学生はあまり目の前の大学における不条理に対して声をあげたりはしません。「まあ死ぬわけではないし」「そこまで問題ではないし」と、自分を納得させ、また日々を過ごしていきます。そして、こうやって諦めていく態度こそが「現実的」だとか「リアリズム」であり、「成熟した大人である」とされています。

しかし、目の前の小さな不条理が見逃されて当然になり続けた結果、今の社会は、私たちが日々を過ごすキャンパスは、どうなっているのでしょうか。

話題になった日本大学のアメフトの事件はどうでしょう。監督が大学の理事の一人で大きな権力を持っていて、自分の将来の進路も握られている中で、倫理や人間性もかなぐり捨てさせられたアメフト部員はどんな気持ちだったのでしょうか。

女性差別に限らず、様々な差別がたしかにあるこの社会で、それでも学業成績や入試の点数はフラットに自分を評価してくれるはずだと一生懸命勉強している人は私の周りにもたくさんいました。そんな希望も裏切られて、あの減点で合格から落とされた人はどれだけ悔しかったのでしょうか。逆に、文科省の局長は賄賂を使って自分の子どもを

東京医大に入学させています。（なんだそれは）

ここで書いたものは日本の大学における不条理のうちの、ほんの一部に過ぎません。他には例えばどんな不条理があるのかは、これを読んでいる学生のみなさんが日々経験し、よく知っていると思います。

大学での不条理というのは、とても扱いが難しい領域の話です。キャンパスで過ごす人間の内、最も割合の大きな学生が声をあげ、行動しなければなかなか変わるものではありません。しかし、大学に歯向かうのは恐ろしい。弾圧は恐ろしいと多くの人が感じています。そんな中で、あなたが不条理にぶち当たった時、「このままでいいものか」と思い悩んだ時、いろいろな人が心配して優しい言葉をかけてくれると思います。「どうせ四年間で卒業するのだから我慢したらいい」「なにも、あなたがやることはない」「仕方ないこと」…。

批判的なものだと、「学生は未熟なのだから、社会に出るから自分の主張したいことは主張しろ」という意見もよく見聞きします。

たしかに、多くの人にとって大学は「通過点」に過ぎません。どうせ卒業していく場所に拘らなくてもいいじゃないか、というのは理解できます。しかし、この「諦めろ」という論理は一生私たちに押しつけられ続けるものです。社会に出た後も、不条理にぶつかった時「そんなことを主張する暇があったら働け」「職場に不満があるなら辞めたらいい」「君が頑張る必要はないんじゃないか」「仕方ない」…。

結局、私たちが目の前の不条理に対して取れる選択肢は、「今、何か行動を始めるか、それとも何もしないか」でしかないのではないのでしょうか。「仕方がない」と、あらゆる人々が、あらゆる勢力が諦めてきたのがキャンパスという現場の不条理です。しかし、そんなに簡単に、この不条理は受け入れていいものなのではないのでしょうか。そんなに簡単に、奪われていいものばかりなのではないのでしょうか。

「こだわりたいもの」「大事にしたいもの」「目の前の不条理に対する想い」に関しては、人の数だけさまざまなものがあると思います。それをあえて、私がここに書こうとは思いません。それらは、これを読んでいるあなた自身の主張で、行動で、生きざまでもしか示せないものです。

無数の若者がいて、それぞれの人生があって、それぞれの成したいことがあるでしょう。あなたの考えと私の考えは、全ては同じではないかもしれませんが、しかし、どこかで一致できるならば、一緒に論議して、一緒に何かやってみましょう。全学連大会には「目の前の不条理にどう立ち向かうか」を考える人々が集まります。

あなたがキャンパスや社会の不条理に立ち向かおうと一歩踏み出すなら、全学連は力の限り共に論議し、闘います。

不条理にぶつかり悔しさを感じていたり、矛盾を感じていたり、生きにくさを感じている全ての学生や若者に、本気で目の前の不条理をぶち破りたいあなたに、全学連大会に来ることをおすすめします。あなたと共に悩み、笑い、闘う仲間が見つかるかもしれませんよ。